

牛のお灸に学ぶ

高松文三

近年、アメリカにおける鍼灸の普及はブームと呼ぶにふさわしいが、鍼灸するのは人間だけとは限らない。犬猫などのペットにする鍼も、それほど珍しいことではなくなってきた。もちろん、獣医師が鍼を施すのだが、実はI.V.A.S.と呼ばれる国際的な獣医鍼灸協会があるのをつい先頃知って驚いた。アメリカ国内だけでもメンバーが千人ほどいるというのだから、獣医師が鍼灸に寄せる関心というのは並のものではない。動物にはプラシーボ効果を無視してよいだろうから、やはり確実に効くという確信があつてのことだろう。

そこで今、日本で繁殖障害などの各種の牛の疾患に、お灸を使ってすごい効果を出して話題になっている獣医師を紹介したい。

保坂虎重先生(60歳)が牛にお灸を試すきっかけになったのは、日中国交回復と、近くがよく流行っている鍼灸院と、その向かいのこれまたよく流行っているラーメン屋であるという。

1972年、ニクソン大統領は中国を訪問し、それがアメリカにおける大々的な鍼灸のきっかけになったことは周知のとおりである。同じ年に、少し遅れて田中首相が訪中。日中国交回復がなり、その副産物の一つとして中国の鍼麻酔は日本でも話題を呼んだ。

以前から、マニュアルどおりの治療法に飽きたらなかった保坂先生はそれまでも漢方を家畜に応用したりしていた。そういう先生だから、鍼の話題は大いに刺激となり、まずは牛に電気鍼を施してみた。ところが牛の方は気味悪がるばかりで、これという手応えがなかった。そんなとき、知り合いの酪農家の話しにふと感じるところがあった。その人は胃腸が悪くて鍼灸院に通っていたが、お灸をしてもらうと、急に気分が爽快になり腹が空くとのこと。そしてそのまま向かいのラーメン屋に飛び込むのだそう。おかげで向かいのラーメン屋も大忙しというような話であった。

“これはひょっとすると牛にも応用できるのでは”と思いつき、早速、調子の悪い牛にお灸をしてみると、先生の予想どおり、その牛は涎を流し始め、次々と糞と尿を出し、急に元気になって食べ始めたのである。そのお灸の即効性に、保坂先生はハッテしまったのである。

これ以後、保坂先生が牛にまつわる様々な疾患にお灸を試みたのはいうまでもない。即効性の高い消化器疾患はいうにおよばず、不妊症を含む繁殖障害、泌尿器疾患、運動器疾患など、大抵の疾患にこうかがあるという。また従来の方法と併用してもよく、応用自在ということらしい。お灸の特性として：

1. 比較的簡単である
2. 資格が要らない
3. 安価である
4. 副作用がない
5. 即効性がある などがあげられる。

繁殖障害に悩んでいたある酪農家は、お灸を始めてから牛の一年一産が可能になり、すっかりお灸のファンになってしまった。



写真提供：毎日新聞 久留米支局

その酪農家は繁殖障害におけるお灸の効果を四つあげている。

1. 発情がはっきりし、妊娠しやすくなった。
2. 乳房炎が少なくなった。
3. 産後の起立不能がなくなった。
4. 後産停滞がほとんどなくなった。

これらは要するに、産後の肥立ちがよくなるということだ。

お灸が効くことは確かだ。だがそのメカニズムには、まだ不明な点が多い。しかしお灸の及ぼす作用については、多数の例から帰納的に割り出せる。保坂先生はその作用を大体次のようにまとめている。

1. 自律神経系の調節。中でも副交感神経を刺激する。したがって、胃腸の蠕動促進、子宮収縮・膀胱収縮などを促す。牛のツボが背腰仙骨部に多いのも、そのあたりの神経支配と関係が深いようだ。
2. 免疫系の刺激。一種のヤケドの傷が免疫反応を刺激する。

3. ホルモン分泌促進。100日以上発情の来ない牛にもお灸をすると、90%~100%の率で翌日から一週間の間に発情が起こることや、乳量が20%程増えたりすることなどから見ても、これは明らかだ。ただ面白いのはホルモン分泌過剰な場合は、むしろそれを抑える働きがあるということだ。そこで次の作用

4. 二重調整作用。自動調節作用と言うべきか。例えば便秘にお灸をすると、便が柔らかくなり通常便となるが、逆に下痢にお灸をすると便が硬くなり通常便となる。牛の生体にお灸の刺激を極度に上手く利用し、自分にとって一番バランスのよいところへ持ってゆくようだ。

5. 転調作用。病態がはっきりしないものにお灸をすえると、病態がはっきりして、後の処置がしやすくなる。

私自身は四番目の二重調整作用というのが一番興味深い。どの牛に対しても、どのような病気に対しても大体同じツボで、同じ刺激量で治る理由もここにあるようだ。人間の場合、牛ほど単純に行かないにせよ、ある程度こういう作用があるはずだ。お灸に関して

は、病人や病状の陰陽虚実それぞれにそれほど拘わらずともよいのではないか。いわゆる沢田流の基本穴が、大抵の疾患に効果があるのもそんな理由ではないかと思う。

では、保坂先生が長年の経験から選んだ牛の基本穴を紹介しよう。9穴ある。くり返すようだが、これらのツボでほとんどの問題は片が付くという。(図-1)

天平 第13胸椎と第1腰椎棘突起との間で
柔らかい陥凹部

後丹田 第1と第2腰椎棘突起間の陥凹部

腎門 第2と第3腰椎棘突起間の陥凹部

安腎 第3と第4腰椎棘突起間の陥凹部

百会 腰椎と仙椎棘突起間の陥凹部

帰尾・尾帰 百会から腰角方向へ8センチ離れたところ。左側を帰尾、右側を尾帰という。

尾根 仙椎と第一尾椎の間。

予備のツボ 天平の前の陥凹部

人間のツボと比較してみたい。

天平は背中(GV7)、後丹田は懸枢

書評

前川智恵子

『黄帝の足跡-鍼灸伝統の歴史を追って』

著者ピーター・エクマン

東洋医学には、お互いに全く違った特質をになう伝統の流れがいくつかあります。特に、鍼灸の伝統には多くの流派があります。事実、東洋から西洋へとこの医学システムが伝わってゆく過程で、極東の国々そしてヨーロッパの国々でも、その国特有の鍼灸術のスタイルを発展させて今日に至っています。

西洋にあっては、これらの新しく発展した鍼灸術の中で二つのスタイルが比較的名になりました。それらは今日、革命以後の新中国で広く使われ、中国伝統鍼灸と名うってアメリカに多大な影響を与えたTCMと、イギリス・レミントンとアメリカ・メリーランド州のコロンビアで教えられている五行鍼法（レミントン鍼法=L.A.）と呼ばれているものです。

この二つの流派の治療法が共通の伝統に根ざすものとはいえ、共に20世紀に入ってから発展したという事を、歴史的に実証している記述は英文出版物の中には見あたりません。今日に至るまで、西洋では鍼灸師でさえもこの事実を知っている人は非常に稀です。

著者ピーター・エクマンは、医師として鍼灸師として治療を続け、かつ教鞭をとる間に20年の年月をついやして、異なった鍼灸流派の起源についてインタビュー・手紙のやり取りそして文献と、広範囲にわたる歴史的リサーチの成果を記しました。そして、西洋の鍼灸師の間で最も知られている二つの流派、TCMとL.A.に視点を置き、他の諸国で発展した鍼法とどのような関わり合いがあったか、またこの二つの流派が世界的な性質を持ったものであることを証明しています。

この本は、くだけた一人称のスタイルで書かれていますが教訓的で哲学的であり、又探査的要素は、徹底的な分析と歴史的記録によって裏打ちされた力作です。

この本は、TCMが1950年代に新中国で作られたという史実を知らずに、TCMのみが唯一の鍼灸法と思い込んでいるアメリカの鍼灸師にはぜひ読んでほしい本です。また、J.R.ウオーズレイによって発展された五行レミントン鍼法が教えられているレミントン校・コロンビア校の卒業生も、この

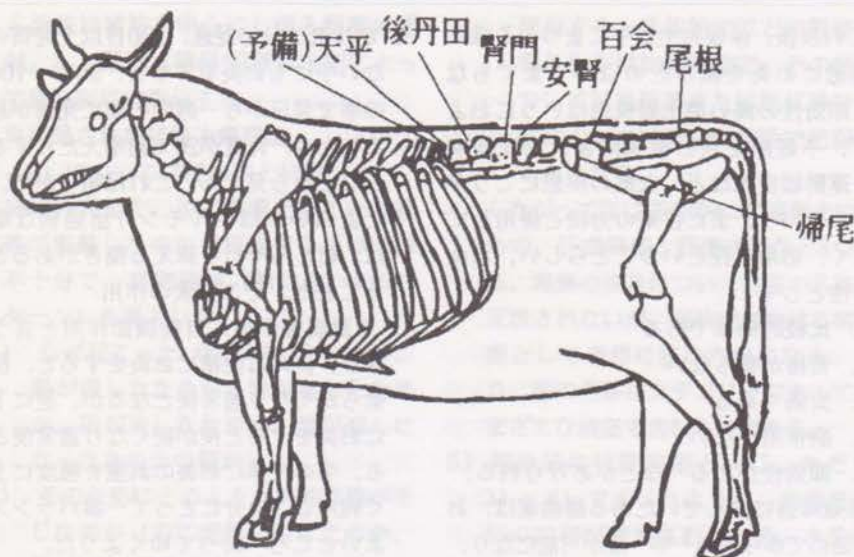


図-1 9カ所のツボ

(GV5)、腎門は命門 (GV4) であろう。安腎も命門の変動穴と見る。百会というツボは人間では頭の頂点にあって百脈の会するところの意である。別に一身の陽気の最高点の意もある。するとやはりこれは、腰の陽関 (GV3) が一番近いようだ。牛は腰でものを考えるのかも知れない。尾根 (尾根) は胞背 (BL48) であろう。尾根は腰俞 (GV2) と思う。こうしてみると人間の場合の不孕症のツボと似ている。人間の場合、これに下腹部のツボを2~3加えたいところだが、牛では無理だろう。

実際のやり方は、まず温灸用のモグサをピンポン玉大に丸めたものを必要数だけ用意する。牛の頭を保定する。尻尾を後ろ足にひもで軽く縛っておく。モグサを尻尾で払い落とされないようにするためだ。次に灸ツボに味噌を塗る。これは脱落防止とヤケド防止の二つの意味がある。(私見だが、アメリカで試すときはアロエゼリーがよいと思う。)着火してから燃え尽きるまで5分~10分。この間、くれぐれも火には用心をすること。

私自身が牛のお灸から学んだことについて少し触れたい。私の治療はほとんどお灸に頼ってきたが、牛のお灸の話を聞いてからますます我が意を強くした。もうじき四人目の子供が生まれるのだが、保坂先生の話を読んで以来、ほとんど毎日妻にお灸をすえるようになった。産後の肥立ちもきつとよいに違いないと信じている。あと一つ考えさせられたのは、健康管理に関して言えば、牛が置かれている現状は人間のそれとほとんど変わりが無いということだ。

つまり、人間は自分の都合の良いように

牛の生命を操作する。美味しい肉にするために飼料をいじくり、早く太らせるためにホルモンを与え、病気を防ぐために抗生物質を入れたりする。牛は本来の抵抗力を無くし、ますます病気に罹り易くなる。例えば、乳牛がよく罹る乳房炎なども、昔は漢方薬や民間薬などを使って、それなりに上手く対処していたらしいが、今は抗生物質一本槍という。当然、耐性菌が出現し、その抗生物質は効かなくなる。そしてまた新しい抗生物質が出てくるという悪循環に陥る。『高度な検査技術と新薬を駆使して最新の治療をしている獣医がいるところほど、乳房炎が治らない。』という事態も起こっているという。治療費がかさむ一方で、実のところ治療に関しては何も進歩していない。不孕症におけるホルモン剤の多用も、悪循環を生む。こうしてみると、家畜の疾病の多くは抗生物質やホルモン剤などのクスリに頼りすぎた『人災』ではないか、というのだ。

我々もこの家畜たちと大差があるようにとは思えない。そこから脱するには、自分の健康は自分で守るという姿勢が一番大事である。その時、お灸という手軽で誰にでも出来て、しかもよく効く療法は、強い見方になってくれるだろう。

高松文三, D.O.M., L.Ac.

1982年、ニューメキシコ・サンタフェのKototama Insutituteを卒業。1988年よりダラスにて開業、現在に至る。鍼灸に加え操体法、マクロバイオティックも指導する。合気道は10年以上の修行を積み、まもなく指導もする予定。